

# 園のおたより



第 2 号

令和 4 年 5 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

5月に入ると、自然観察園で多くの動植物の活発な活動が見られるようになりました。ある日、園児の一人が、黒くて細長い甲虫を見つけたということで名前をたずねてきました。「よくわからないけどコメツキムシかもしれない。図鑑で調べて分かったら教えてください。」と答えました。数日後に、背中側の胸部が赤かったことから、図鑑の「セアカヒラタゴミムシ」ではないかと教えてくれました。生き物の特徴から名前を特定する面白さを感じている様子でした。これからも様々な生き物について調べてどんどん詳しくなっていけることでしょう。

地球上には、様々な環境に適応して数百万種類の生物が暮らしています。私たち人類ホモ・サピエンスは分類上ただ1種類の生物ですが、自然環境を作り変えることによって、地球上のあらゆる場所に進出してきました。一方で、そこにいた様々な生物が追い出されたり絶滅してしまったりしてきました。

そこで、世界的に生物の多様性を守るための活動が進められています。SDGs（持続可能な開発目標）では「14 海の豊かさを守ろう」および「15 陸の豊かさを守ろう」が、海や陸の利用は生態系が持続できる範囲とすることを求めています。人の都合のみで自然を利用するのではなく、他の生物たちが進化の過程で作りに上げてきた生態系を壊さないように慎重に利用することが必要です。

そのためにも、子供達には、まずは生き物に関心を持って接し、多様な生き物たちの存在と、彼らの精一杯に生きる姿を知って、生命の尊さや逞しさを感じとってほしいと思います。本園の自然観察園やビオトープもそれを意図した環境ですが、本物の自然とは異なります。ご家庭で海や山などにお出かけされる際は、ぜひお子様とそこに生きる生き物たちの存在について話題にして、その場所の生態系を大切にする気持ちを育てて頂けるようお願いいたします。



## 〈ごっこ遊び〉の魅力

幼稚園ではいろいろな遊び方がありますが、その一つに「ごっこ遊び」と言われる遊びがあります。家族の誰かになったり、ある職業の人になったり、お話の登場人物になったり、動物になったり、空想の生き物になったり、乗り物になることもあります。自由自在に現実の世界と架空の世界を行き来しながら、遊びを楽しんでいる様子が、どの学年、時期にも見られます。

私が、初めて担任をしたのは2組（4歳児クラス）でした。その時、一番難しく感じたのが、「ごっこ遊び」にどのように関わればよいかということでした。子ども達が自由に架空の世界を広げて遊んでいく場面で、自分だけが現実の世界として「遊び」を考えていたのかもしれませんが。その後、多くの子ども達の様々なごっこ遊びを見たり、一緒に加わったりしていく中で、自然とその架空の世界自体を面白がっていけるようになりました。幼児期の「ごっこ遊び」には、本当に多くの要素が詰まっていることも実感しています。

子どもの「ごっこ遊び」が成り立つ要素として、5つのことが含まれていると考えています。①現実の世界とは別の世界へと行き来するための「イメージ」、②子ども自身がなりきっている「役」、③遊びの拠点となる「場」、④遊びに用いられる「物」（遊具・道具・自然物など）、⑤表現されている「動きや言葉」の5つです。

「①イメージ」は、現実の生活で体験したこと、見聞きしたこと、絵本や物語にふれたことなどから生まれてきます。架空のごっこですが、現実の生活が変化に富むことで、わくわくするイメージが広がっていくように思います。「②役」については、いつの間にか何かになりきっている3歳児の姿から次第に変化し、5歳児になると、現実の自分と役の自分を切り替えながら遊ぶようになります。例えばお店ごっこの中で、さっきまで「いらっしゃいませ」と店員だった人が、「ちょっと待って」と現実の5歳になって品物を修理することがあります。「ごっこ遊び」をしているという意識が、少しずつ明確になっていくようです。「③場」や「④物」については、「見立てる」ことがとても重要になります。幼稚園では、一つのものにしか使えない場・物ではなく、多様な「見立て」ができるものを大切に環境を整えています。その中で、窪んだ場に葉っぱを集めて海に見立てたり、落ちていた枝を釣竿に見立てたりなど、自然物も意味ある環境として位置付けています。「⑤動きや言葉」は、一人のごっこから、友達と互いに動きや言葉を表し合うことで、より複雑なごっこになっていく点で、大きな役割を果たしています。

原稿を書きながら、明日からまた、子ども達がどんな「ごっこ遊び」を見せてくれるのか楽しみになってきました。

(副園長)

# クラスだより



## 1くみ

### 「お弁当おいしいな」



1組での生活が始まって1か月が過ぎました。子ども達は、園での生活に慣れてきたようで、自分でできることをたくさん教えてくれるようになりました。「ボタンがつけられたよ」「手を石鹸で洗えたよ」「先生がいなくても片付けができたよ」毎日いろいろな「できた」を教えてくれ、その喜びを味わいながら生活を進めていっています。

5月の子ども会では、一人一人こいのぼりを作ったものを2組、3組のみんなへお披露目しました。体の色をピンク、黄色、水色、黄緑の4色から好きな色を選ぶところから始め、鱗の丸シールも自分が好きな色を思い思いの貼り方をして、自分のこいのぼりを作れたのではないかと思います。子ども会では、「1組さんのこいのぼりかわいい」と2組、3組のみんなに言ってもらいました。

5月の連休が明け、1組でもお弁当が始まりました。お弁当開始前日に「明日は、幼稚園でお弁当を食べるよ」と伝えると、「楽しみ!」「やった!」と喜ぶ声上がり、とても待ち望んでいたようでした。お弁当当日、登園して1組の部屋まで来ると、かばんの中身がいつもと違い、「重たい!」と言ったり、「今日お弁当だよね?」と聞いたり、朝からお弁当を楽しみにしていました。ついにお待ちかねのお弁当。お弁当を食べることを楽しみに、わくわくしながら、準備を始めます。ハンカチを取り換えて、手洗いうがいをして、かばんからお弁当を出して、並べて、そして、みんないただきます。ふたを開けて、中身をみて嬉しそうに食べ始める1組のみんなに、「おいしい?」と尋ねると、「おいしい!」と口をそろえて笑顔で教えてくれました。お弁当が始まってから毎日朝からとても嬉しそうに登園し、おいしそうにお弁当を食べて食事の時間を楽しんでいます。お弁当の時間は、食べきれた満足感や1組で食べる楽しさを感じられるようにしていきたいと考えています。これからもたくさん遊んでお腹をすかせて、ご飯を美味しく食べていけるように過ごしていきたいと思っています。



## 2くみ



「作ってみたい あんなものやこんなもの」

5月に入り、気温が上昇して過ごしやすさを感じるようになってきました。学級の中で過ごすことに慣れてきて、一人一人が自分の思いを表しながら伸びやかに過ごしています。また、自分から興味のある遊びに関わっていったり、生活や遊びの中で友達同士たくさん言葉を交わしたりする場面が増えてきました。そんな関わりを支えるのが遊びの中のいろいろな「もの」の存在です。砂場で使うコップやお椀など、生活に身近なもののほか、子どもたちがいろいろな素材を組み合わせで作ったり描いたりしたものもあります。

ある日、お弁当の食休みの時間に「車を作りたい！」という人がいました。ちょうどその週の初めから、お菓子などの空き箱を新しく材料棚に加えたところで、それを見て何かアイデアを思い付いたようです。話を詳しく聞いてみると、タイヤを付けて、走るようにしたいということでした。その日は材料がなかったので、設計図を描いて、翌日作ることにしました。次の日、降園前の時間に、実際に作った車をクラスに紹介すると、「私も作ってみたい！」という人がたくさんいました。その次の日にはたくさんの人が車を作ったので、停めておく駐車場を作りました。積み木を使って3階建てにして、そこから発車できるようにスロープも遊びの中で付けました。作った後は遊びの中で繰り返し使い、特に食休みの時間の中で、じっくり遊んでいます。

同じ車でも、まったく別の作り方をする人もいます。去年の2組が大きな消防車を段ボールで作って遊んでいるのを見ていて、自分たちでも大きなパトカーを作りたいという人がいました。そこで、段ボールをつなげて白い紙を貼り、クレヨンを使って窓やライトを描き足していきました。警察ごっこで使う4人乗りのパトカーの完成です。お面やトランシーバー、そしてパトカーと、イメージをつなげるものが遊びを面白くしています。

車を例に紹介しましたが、他にもバッグや虫取り網などいろいろなものを作っています。人どもの、人と人の繋がりを大切に過ごしていきたいと考えています。



### 3くみ



#### 「自分たちで育てる」

気まぐれな天気の高貴な晴れ間に、みんなで自然観察園に出掛けました。以前はなかった畑を見つけると「知ってるよ。僕たちもサツマイモを育てるんでしょっ」と自分たちで育てることを心待ちにしていました。そこで、サツマイモが大きく育つようにみんなで畑の石拾いをすることにしました。グループの友達と小さな石も見逃さないように慎重に石を探しながら「こんなに大きいのがあった」と、3組のみんなでこれから育てる野菜たちが大きくなるための準備をしています。

3組になってすぐ、2組の時に植えた大根のプランターの引越しを行いました。ある日、「先生、大根ムキムキになってるよ」と大根がとても大きくなっていることに気付く人がいたので、抜いてみることにしました。「ムキムキ大根だから、僕たちだけで抜けるかな」と心配そうな様子で大根に手をかけてみると、小さな大根が顔を出しました。抜いた大根の大きさに驚きながらも「こっちは足みたいな形だ」と出てくる大根を楽しみにしながら抜いていきました。

「この大根どうするの」との声があったので、大根をどうするかみんなで話し合うことにしました。いろいろな意見が出る中で、「動物のえさにしたらいいんじゃない」とのアイデアの声に、「今度動物園に遠足に行くから、飼育員さんにあげればいいんじゃない」と意見が続きました。みんなでそれがいいということになり、遠足で大根を渡すことになりました。遠足当日、動物園の方から「みなさんが大切に育てた大根を動物たちに食べてもらいますね」と言ってくると、「よろしく願いします」と自分たちのアイデアが実現できたことに満足そうな表情でした。

いろいろな植物に触れたり、自分で栽培したりすることで今とは違った気持ちや考えが生まれている3組さん。これからの栽培活動の中でも、それぞれの中にある思いを大切にしながら、「こうしたい」を実現していけるように支えていきたいと思っています。